～占冠村の地域素材～

１．占冠村の概要

《占冠村の位置》

日高・夕張の２大山脈にはさまれ，全域が鵡川水系に属する。境界がはっきりした分水嶺から成り立っているため，地形はすりばちの底のようになっている。

行政面から見ると，上川支庁管内最南端に位置し，東・北は南富良野町，南は日高町，平取町，西は夕張市及び穂別町に接している。総面積は約５７１平方㌔㍍で，その約９４％が山林である。

村内は，同一水系の中にあるといいながらも，南北にわたって村を真っ二つに分離している分水嶺が存在している。その東側がトマム地区，西側が中央地区である。

《村名の由来》

「占冠」は，アイヌ語の Shimokap（シモカプ）より転化したもので，「甚だ静かで平和な上流の場所」という意味である。また，トマムはアイヌ語の Tomam（トマム）より転化したもので，「沼のあるヤチ川」という意味である。

《占冠村の気象》

近接した高峻な山岳に囲まれていることから，気候は内陸性である。気温の日較差，年較差が大きく，特に冬はマイナス３０℃に達することも数日ある。年降水量は１，４００ mm に達し，積雪は，１００ cm 前後になる。

《占冠村の現況》

２００２年（平成１４年）１０月，「占冠村開基１００周年記念式典」が行われた。

２００４年（平成１６年）１０月末日での総人口は１，５６１人。その内，約７割が中央地区，３割がトマム地区に住んでいる。

学校は，中央地区に占冠中学校，占冠中央小学校，占冠小学校。トマム地区にトマム小学校・トマム中学校の合わせて５校が存在する。しかし，２００５年３月をもって占冠小学校が廃校となった。

２．地域素材

《占冠村物産館》

ＪＲ石勝線占冠駅前の「占冠村物産館」内は，郷土資料室のほかに，お土産品やレストラン，観光案内所がある。

『郷土資料室』には，開拓時の民具の展示をはじめ，村の景勝地のパネルが展示されている。また，お土産店『プレゼントショップのぶ』は，村内一の商品数を誇り，フキクッキー・フキようかん・みそ漬等の占冠村特産品の山菜製品を中心にとりそえている。

《道の駅　自然体感しむかっぷ》

国道２３７号線の占冠中央交差点に面している「道の駅　自然体感しむかっぷ」には，生活情報センターをはじめ，お土産店やレストラン等がある。

『生活情報センター』は，休憩所をかねた情報提供施設で，占冠村をはじめ上川地方の各市町村のパンフレットを観光客に無料で提供している。６月から１０月には観光案内所も設置され，より詳しい道路情報や観光情報を得ることができる。

お土産品店『エムアイ企画』には，特産の山菜加工品である，ふき・わらび・タケノコ・きのこ類などを原料にした水煮や，みそ漬が並んでいる。

陶芸の店『嘉辰窯』には，トマム地区に在住する陶芸家が焼き上げた作品が並べられている。陶芸品の販売だけでなく，手ひねり・絵付け体験もできる。

また，「寒さをＰＲしない手はない！」ということで、道の駅店主会により，道の駅横に巨大温度計を設置された。夏には，盛夏と厳冬の気温差６０℃を記念撮影する観光客の姿が多く見られる。

《公営山菜加工場》

村の広大な面積を有する森林には，各種の山菜が群生している。春から秋にかけては，村内はもちろん村外からもたくさんの人たちがやって来て，国道脇などで山菜採りをしている人たちの姿をよく目にする。

この山菜の商品化を目指し，また過疎対策の一環として１９７４年（昭和４９年）に富良野地区森林組合山菜加工場を設立した。その後，１９８４年（昭和５９年）からは，社会法人占冠山菜産業振興公社が運営を続けている。

製品には，フキ・ワラビ・タケノコの水煮・みそ煮や，クッキー等の銘菓がある。原料は，かつては占冠村内で採れたものを利用していたが，商品の増加や多様化に伴い，現在はその大半を村外から依存している。ロシア，中国からの輸入の割合も大きい。

《丸桝木材》

総面積の約９４パーセントが山林で占める占冠では，林業は農業とともに村を支える基幹産業として大きな役割を果たしてきた。戦争直後からの約２０年間は，村の大半の人たちが林業に関わっていたと言われている。その当時の材木置き場の様子や木を運搬している様子の写真は，資料館や副読本などで目にすることができる。

現在，かつて林業でにぎわった面影はほとんど皆無に等しいが，森林資源を保護するために除間伐などの様々な取り組みをしている。夏になると，教室にもチェーンソーの音が聞こえてくる。

製材所も次々と無くなってきているが，丸桝木材は，中央地区で唯一存在している製材所である。

《赤岩トンネル工事現場》

地形的条件から，かつては「陸の孤島」と呼ばれていた占冠も，道路や鉄道の開通などにより，大きく発展してきた歴史がある。また，現在も高速道路の工事が進められており，年々ダンプ等の工事関係車両を多く目にするようになっている。

その中で，中央地区と国道２７４号線（札幌方面）を結ぶ広域幹線道路「夕張新得線」の改良工事が行われている。その１つとして２００１年（平成１３年）より『赤岩トンネル』の掘削工事が行われている。

施工は，清水・荒井・熊谷（ＳＡＫ）の合同企業体（ＪＶ）で行われ，全長約２，２００ｍのトンネルを，２００６年（平成１８年）に完成できるように工事が進められている 。

赤岩青巌峡の景勝を残すなど自然保護に努めながらの工事，地すべり層の中に粘板岩(硬)や蛇紋岩（柔）がなど様々な地盤が混在している難しい工事，無事故・安全を第一にしての工事など，多様な見方でこの工事を捉えることができる。

さらに，完成すると，札幌方面への最短ルートが約２０キロ短縮されることから，トマム方面への観光ルートとしても期待される。また，将来的には高速道路ともアクセスすることから，広域ネットワーク路線としての有効な利用も期待されてもいる。

《占冠村デイサービスセンター》

２００２年（平成１４年）に開業した『デイサービスセンター』は，介護を必要としているお年寄りの方の在宅生活を支えることを目的に，１人週２～３日の介護（入浴）を行っている。子どもたちも，介護サービス車が巡回している様子を見かけている。

施設内は，段差のない玄関，広いトイレ，たくさんあるインターホン，介護レベルにあわせた数種類のお風呂など，様々な工夫を目にすることができる。

センターでは，活動の様子を知らせるために，村広報を利用して周知し，広く来場者を呼びかけている。生活相談員の方も，「介護の様子を見学する中で，体の不自由な人も子どもたちと同じように生きるために生活していることを知り，その中で，今後共に生きていくことを考えるきっかけになってくれれば。」と話している。

《双民館》

１９９７年（平成９年）に閉校した双珠別小学校の旧校舎を利用し，双珠別郷土資料室「双民館」としてオープンしている。
『郷土資料室』には，２２戸の双珠別住民こぞっての出品による展示物が並べられている。双珠別の歴史を語るように，移住人殖民時代，戦後開拓時代，過疎化が進行する今日という時代を反映した展示内容である。木挽き鋸，風呂鍬，金平鍬，三本鍬などは明治入植期のもの，から竿，とうみなどは戦前戦後共通のもの，牛乳輸送缶は酪農が盛んだった当時のものである。
その他，研修施設としての体験プログラムが用意され，宿泊のほかにもアイスクリーム作り・ソーセージ作り・クラフト作り・川遊びなどができる。
村内では，小学校５年生が，毎年宿泊研修で利用している。

《ニニウ地区》

中央地区から約１０ km 離れたニニウには，かつて３０戸以上の農家が存在し生活していた。村内の中では最も気候温暖で耕作適地ではあったが，現在は全戸離農している。
その原因の一つが，交通至難である。中央までの道のりには赤岩青巌峡の景勝地があるように，人一人歩ける幅がない絶壁が続いている。現在でも，道路が設置されてはいるが，２００１年（平成１３年）の水害により，中央－ニニウ間は寸断されたままになっているほどである。
よって，ニニウには原始の自然ではなく，廃屋や看板，区画されていたあぜ道などが残り，明らかに人間の手が加わっている独特の景観が形成されている。
現在は，占冠村により「ニニウ自然の国」として，キャンプ場やサイクリングターミナル等の施設が整備されている。

《アルファリゾート・トマム》

占冠村は，以前『和牛の里』として有名で，村内各地に牧草地が見られ多くの酪農家があり，農業を基幹産業としていた。
しかし，過疎化の進行により，１９８１年（昭和５６年）には人口が１，４３２人まで減少し，トマム小・中学校も全校児童・生徒が５名に減るなど，学校・地域の存続が危ぶまれる時期もあった。
そこで，占冠村では，トマム山を利用したリゾート構想を描き，１９８１年（昭和５６年）１０月の石勝線の開業に続き，１９８２年（昭和５７年）１２月にトマムスキー場をメインとするアルファリゾート・トマムのオープンにこぎつけた。
トマムリゾートは，四季折々の自然を体感しながら，年間を通じて各種スポーツに興じることができるリゾート地として，年間約１００万人近くの人々が訪れている。スキー場はもちろん，ゴルフ場・テニスコート・超大型造波プール・熱気球・アーチェリー・自然散策・水の教会など，多彩なレジャーが楽しめる人気スポットである。
宿泊施設は，リゾート内のホテル群をはじめ，近くにはペンション街もある。一昔前まで多くの和牛が食していた牧草地のほとんどがリゾート地に生まれ変わり，和牛農家のほとんどが廃業・転業した。
現在，１，０００ｈａにも及ぶリゾート地は，リゾートマネージメントと星野リゾートの２社により運営されているが，近年の不況による会員権の販売不振，会社の倒産等によるイメージの悪化など，宿泊客の減少による営業不振により，その先行きに暗雲が立ち込めている。
閉鎖施設の村所有化など，事態打開の動きは見られたが，そのために村の負債が益々大きくなっている現状がある。したがって，アルファリゾート問題は，今後の村自体の存続を左右するものになっている。

３．教材化の例

【３年「見つめようわたしたちのまち」】

まちたんけんに出かけ，「占冠村物産館」「道の駅　自然体感しむかっぷ」など，みんなで利用する公共施設というものがあることを知る。

【３年「見直そうわたしたちのくらし」】
「占冠村物産館」「道の駅　自然体感しむかっぷ」のお土産店の様子を調べ，お店の人の努力を知る。

【３年「まちではたらく人たち」】
「公営山菜加工場」「丸桝木材」「赤岩トンネル工事現場」「アルファリゾート・トマム」を見学し，その仕事の中身と働く人たちの様子にふれる。

【４年「昔のくらしとまちづくり」】
「占冠村物」「双民館」「ニニウ」を見学し，昔に使った道具や開拓・工事の様子を知り，よりよいくらしを求めた先人の努力に気づく。

【４年「わたしたちの住む北海道」】
「道の駅　自然体感しむかっぷ」「赤岩トンネル工事現場」「アルファリゾート・トマム」の見学を通して，仕事や生活の営みを交通が支えていることに気づき，北海道の道路網・鉄道網についても調べようとする。

【５年「工業生を支える人々」】
「公営山菜加工場」の見学を通して，原料・製品の流通，仕事の工夫と大変さ，働いている人たちの願いにふれ，今昔のくらしの変化について考える。

【５年「くらしを支える情報」】
「道の駅　自然体感しむかっぷ」を見学し，情報を提供する人たちの支えや情報機器に気付き，情報の発信者・受信者としての在り方を考える。

【５年「住みよいくらしと環境」】
「丸桝木材」の見学から，働く人の願いを知り，森林のはたらきや資源保護の取組を調べる。

【６年「暮らしと政治を調べてみよう」】
まちづくりの願いから，「赤岩トンネル工事現場」「占冠村デイサービスセンター」「ニニウ」「アルファリゾート・トマム」などの設備が整備されていることを知り，その整備の過程や現状を調べ，占冠村のはたらきかけの仕方や，税金のかかわりについて考える。